平成 22 年 1 月 11 日

第 20 回日本医療薬学会年会実施報告書

第 20 回日本医療薬学会
年会長　北田　光一
千葉大学医学部附属病院　教授・薬剤部長

事業名:　第 20 回日本医療薬学会年会

主催者名:　日本医療薬学会
年会長:北田　光一(千葉大学医学部附属病院　教授・薬剤部長)
会　頭:安原　眞人(東京医科歯科大学医学部附属病院　教授・薬剤部長)

後　援:　日本病院薬剤師会、千葉県病院薬剤師会、日本薬剤師会、千葉県薬剤師会、日本薬科機器協会

実施日程:　平成 22 年 11 月 12 日(金)～14 日(日)

実施場所(会場数:14 会場)

幕張メッセ(国際会議場、展示ホール)
〒261-0023　千葉県千葉市美浜区中瀬 2-1
TEL:043-296-0001　FAX:043-296-0977

アパホテル&リゾート(東京ベイ幕張)
〒261-0021　千葉県千葉市美浜区ひび野 2-3
TEL:043-296-1112　FAX:043-296-1512

京葉銀行文化プラザ(音楽ホール)
〒260-0015　千葉市中央区富士見 1-3-2
TEL:043-202-0800　FAX:043-202-1742

年会の趣旨:

第 20 回日本医療薬学会年会を平成 22 年 11 月 13 日(土)・14 日(日)両日に渡って千葉市(幕張メッセ、東京ベイ幕張)で開催した. 本学会は臨床あるいは医療に直結した分野で活動する薬剤師が直面している課題を議論する場として、平成2年に日本病院薬剤師会を母体として発足し、その後、日本医療薬学会と改称して現在に至っている. この間、一昨年には法人格を取得し、会員数も保険薬局・薬学部・行政・企業関係者等の薬剤師の参画を得て、8,000 名を越えるまでになっている. 年会では、医療薬学研究・教育の発展を反映して一般講演の申し込み数も増加しており、毎年活発な討論が行われている.

医療の急激な進展、医療環境の激変に伴い、多種多様な職能の医療スタッフが、それぞれの高い専門性を発揮して患者中心の医療を実践するために、互いに連携・補完し合うチーム医療の推進の重要性が強く認識されるようになってきた. そこで本年会のメインテーマを「臨床から学び臨床へと還元する医療薬学」とし、特別講演3題、教育講演3題のほか医療薬学研究・薬剤師業務・薬学教育に関連する多くのテーマでシンポジウム・教育セミナーを企画した.

医療薬学研究に関しては、研究の方法論に加えて、薬剤業務の評価のあり方、評価の方法をテーマとしてシンポジウムを企画した. また、拡大の一途を辿る薬剤師業務関連では、薬剤師の使命である医薬品の適正使用の徹底と安全で安心な薬物療法を提供するための日常業務のレベルアップと専門領域の確立のための討論の場を設定した. 各シンポジウムでは多職種連携、チーム医療のなかでの薬剤師としての立ち位置を明確にし、これからの薬剤師業務のあり方についての議論を期待した. 昨年、日本病院薬剤師会から移管し、「がん専門薬剤師認定制度」が新制度としてスタートし、本年5月に「一般社団法人日本医療薬学会認定　がん専門薬剤師」として広告可能な初の薬剤師専門資格として認められたこともあり、がん薬物治療における薬剤師の役割については集中的に議論できるよう十分な時間を配慮した. さらに、薬学教育 6 年制がスタートして5年目を迎えていることから、薬学教育関連では新しい教育と評価の方法や実務家教員の果たすべき役割について議論する場を用意した. また、ワークショップとしては、抗がん剤の取扱いの注意と実践、コミュニケーション能力・技術向上の方法、人体モデルを用いた医薬品による副作用モニタリングのシミュレーションなどを取り上げた.

病院薬剤師、保険薬局の薬剤師、大学教員が一堂に会し、多くの実りある議論がなされ、薬物治療に主体的に関わり医療の担い手として期待に応える薬剤師、大学で医療薬学の教育・研究に関わる薬系教員の更なる資質向上の機会となり、医療に貢献できる医療薬学の発展に有意義な年会となることを期待し、企画した.

会費等の設定

参加費	:	会員	8,000 円（事前登録）	12,000 円（当日登録）
		非会員	12,000 円（事前登録）	15,000 円（当日登録）
		学生	3,000 円（事前登録）	4,000 円（当日登録）
		海外	8,000 円（事前登録）	
懇親会費	:	一般	8,000 円（事前登録）	10,000 円（当日登録）
		学生	4,000 円（事前登録）	8,000 円（当日登録）
		海外	8,000 円（事前登録）	

講演要旨集 : 3,000 円
市民公開講座: 無 料
共催ワークショップ（予約制）: 無 料

事業内容

1. メインテーマ	「臨床から学び臨床へと還元する医療薬学」
2. 年会長講演	1 題
3. 日本医療薬学会学術貢献賞受賞講演	1 題
4. 日本医療薬学会奨励賞受賞講演	2 題
5. 特別講演	5 題（うち 2 題は市民公開講座）
6. 教育講演	3 題
7. シンポジウム	22 題
8. 教育セミナー	1 題
9. 一般演題	1426 題（口頭 180 題・ポスター1246 題）
10. 共催セミナー	24 題（ﾗﾝﾁｮﾝｾﾐﾅｰ 19 題、ﾓｰﾆﾝｸﾞｾﾐﾅｰ 5 題）
11. 共催ワークショップ	2 題
12. 市民公開講座	2 題

参加者数

一般参加者数 : 6,635 名
招 待 者 数 : 59 名
懇 親 会 : 320 名（招待者除く）
市民公開講座 : 51 名

[一般参加者内訳参考資料]

参加者内訳	正会員	非会員	学 生	合 計
事前登録	3,364	1,143	251	4,758
当日登録	798	833	173	1,804
中国・韓国		73		73
一般参加者 計	4,162	2,049	424	6,635

事業成果:

第 20 回日本医療薬学会年会を平成 22 年 11 月 13 日(土)・14 日(日)両日に渡って千葉市(幕張メッセ、東京ベイ幕張)で開催したところ、6,600 名を越える参加者を得た. 1,400 演題以上の申し込みがあった一般演題については、組織委員による採択審査を行い、最終的に口頭発表 180 演題、ポスター発表 1,246 演題となり、計 1,426 演題であった. 例年にも増して多くの参加者と一般演題の申し込みを頂いた. 年会前日の 11 月 12 日(金)には、例年とおり日本病院薬剤師会主催の病院薬局協議会を京葉銀行文化プラザにて行った後、同会場にて日本医療薬学会主催の市民公開講座「病気にならないために」を開催した.

本年会のメインテーマは「臨床から学び臨床へと還元する医療薬学」とし、臨床の現場で遭遇するクウェッションを如何に研究に結びつけ、その成果をどのように臨床にフィードバックするか、医療はチームで行う作業であるのでチーム医療を念頭に、そのなかで薬剤師としての専門性はどうあるべきか、チームのなかの薬剤師の立ち位置について議論する企画をできるだけ多くの領域・分野についてシンポジウムを設定した. また、本年会でも中国、韓国からの参加を得て、薬剤師職能の展開と薬剤師教育をテーマとして国際シンポジウムを開催した.

メインテーマに沿った特別講演3題、教育講演3題のほか医療薬学研究・薬剤師業務・薬学教育に関連する多くのテーマでシンポジウム・教育セミナーを企画した. 医療薬学研究に関連するシンポジウムでは薬剤業務の評価のあり方、方法についての活発な議論が交わされ、この議論の成果が今後期待される. また、ますます多様化する薬剤師業務に関連したシンポジウムでは、薬剤師の使命である医薬品の適正使用の徹底と安全で安心な薬物療法を提供するための日常業務のレベルアップと専門領域の確立のための討論・意見交換が行われた. それぞれのシンポジウムでは多職種連携、チーム医療のなかでの薬剤師としての立ち位置を明確にするとともに、小児における薬物療法、腎機能低下時の薬物療法、合併症を伴った妊婦・授乳婦における薬物療法をテーマとして、今後の薬剤師職能のあり方、展開について議論された. 多様化する薬剤師業務・薬剤師職能についての、新たな展開・発展に繋がる討論の機会となった. 特に、本年5月に「一般社団法人日本医療薬学会認定　がん専門薬剤師」として広告可能な初の薬剤師専門資格として認められたこともあり、代表的ながん種を取り上げ、がん薬物治療において薬剤師の果たすべき役割について、ほぼ半日を使って集中的に議論した. また、薬学教育関係では、長期実務実習の実施の年となっていることから、新しい薬学教育とその評価の方法や実務家教員の果たすべき役割をテーマとしたシンポジウムを企画し、新たな薬学教育の展開について討論した. また、ワークショップとしては、抗がん剤の取扱いの注意と実践、コミュニケーション能力・技術向上の方法、人体モデルを用いた医薬品による副作用モニタリングのシミュレーションなどを企画したが、いずれのワークショップもスキルアップに熱心な多くの参加者を得て盛会であり、大変好評であった.

各会場はいずれも盛況で、十分な席が用意できなかったシンポジウム会場も少なくなかったことから、参加者にはご不便をおかけしたことは反省点である. また、多様化、拡大する薬剤師業務を

カバーできるよう可能な限りの多くの業務関連のシンポジウム・ワークショップを企画したが、２日間の年会日程のなかで全ての領域・分野を取り上げることは難しくなってきているとの印象であった.
年会運営に関する今後の課題がみえた年会であったが、6,600 名を越える病院薬剤師、保険薬局の薬剤師、大学教員が一堂に会し、多くの実りある議論がなされ、医療チームのなかで薬物治療に主体的に関わり医療の担い手として期待に応える薬剤師、大学で医療薬学の教育・研究に関わる薬系教員の更なる資質向上の機会となり、また、医療に貢献する医療薬学の更なる発展に繋がる有意義な年会となった.